

(シンポジウム)

題目：「海洋高次捕食者の保全と持続的利用—トップダウンアプローチ：マグロ類、サメ類、イルカ類を例として—」

日時・場所 平成20年3月31日 9:00～17:30 第6会場(8号館)

企画責任者：田中 彰(東海大海洋)・魚住雄二(水産庁)・宮部尚純・本多 仁・川原重幸(水研セ遠洋水研)・山川 卓(東大院農)

- 09:00～09:10 開会の挨拶 田中 彰(東海大海洋)
- I. 生活史特性—再生産と成長— 座長 山川 卓(東大院農)
- 09:10～09:35 1.マグロ類の生活史、特に産卵と成長の特徴：田邊唯智(水研セ遠洋水研)
- 09:35～10:00 2.外洋性サメ類の繁殖と成長に見られる特性：田中 彰(東海大海洋)
- 10:00～10:25 3.我が国沿岸における小型ハクジラ類の生物学的特性値—ハナゴンドウを中心に：木白俊哉(水研セ遠洋水研)
- 10:25～10:40 質疑
- II. 摂餌をめぐる課題 座長 川原重幸(水研セ遠洋水研)
- 10:40～11:05 1.西部北太平洋亜熱帯・移行域におけるマグロ・カジキ類の捕食者としての役割：渡辺光(水研セ遠洋水研)
- 11:05～11:30 2.八丈島周辺海域におけるサメ類の食性と漁業との競合問題：堀井善弘(東京都島しょ農水総セ・八丈)
- 11:30～11:55 3.小型歯鯨類の採餌特性：大泉 宏(東海大海洋)
- 11:55～12:10 質疑
- III. 漁業と資源の現状 座長 本多 仁(水研セ遠洋水研)
- 13:15～13:40 1.マグロ類：宮部尚純(水研セ遠洋水研)
- 13:40～14:05 2.外洋性サメ類の資源状況：松永浩昌(水研セ遠洋水研)
- 14:05～14:30 3.小型鯨類漁業の現状と管理：岩崎俊秀(水研セ遠洋水研)
- 14:30～14:45 質疑
- IV. 直面する問題点と検討策 座長 魚住雄二(水産庁)
- 14:45～15:10 1.クロマグロ若魚の多獲と蓄養(養殖)：山田陽巳(水研セ遠洋水研)
- 15:10～15:35 2.サメ類の保全と国際的保護運動の問題：中野秀樹(水産庁)
- 15:35～16:00 3.イルカ類の観光利用とその課題：森 恭一(小笠原ホエールウォッチング協会)
- 16:00～16:25 4.高次生物の捕食が漁業に与える影響を評価するための複数種モデル：岡村 寛(水研セ遠洋水研)
- 16:25～16:40 質疑
- 16:40～17:20 総合討論 座長 田中 彰(東海大海洋)
魚住雄二(水産庁)
宮部尚純(水研セ遠洋水研)
本多 仁(水研セ遠洋水研)
川原重幸(水研セ遠洋水研)
山川 卓(東大院農)
- 17:20～17:30 閉会の挨拶 本多 仁(水研セ遠洋水研)

[企画の趣旨]

海洋生態系における高次捕食者の影響が、食物網を通じて次第に低次消費者へと伝播することに着目し、漁業による高次捕食者の捕獲が系全体の構造と機能に与える影響を把握しようとする「トップダウンアプローチ」が近年、注目されている。海洋の高次捕食者であるマグロ類、サメ類、イルカ類は水産資源として利用される一方、有用な多獲性魚類を捕食し、漁業と競合関係にある。マグロ類は資源の減少に伴う漁獲量の削減と蓄養の

増加、サメ類は様々な漁業での混獲・投棄そしてフカヒレの高消費と魚肉の低利用、イルカ類は漁業資源と観光資源としての利用と保護活動との調整などの問題を有している。本シンポジウムはこれらの高次捕食者が直面している問題点を整理し、生態系内における重要な動物群としての高次捕食者の保全と持続的利用を図るためのトップダウンアプローチの検討を目的とする。